

地域特産野菜を核にした持続的な地域農業の推進

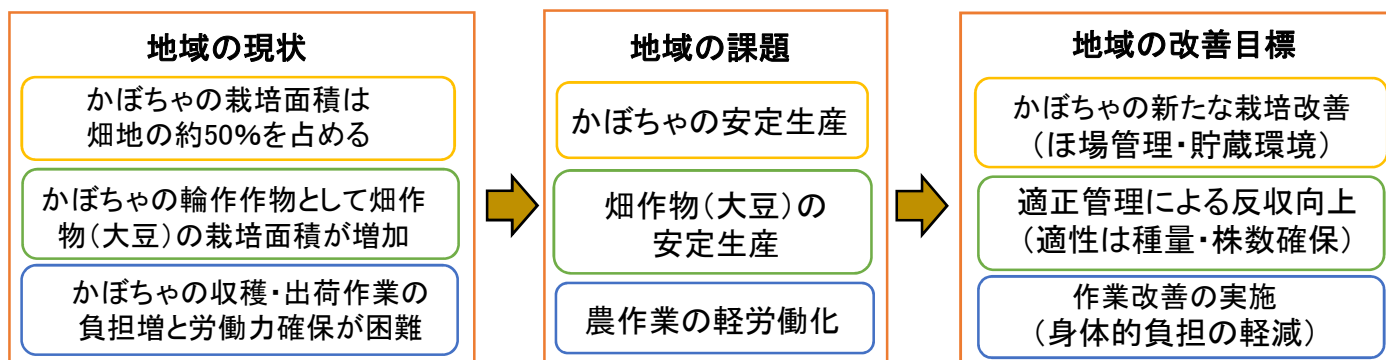
～次世代に受け継ぐ地域の「輪」と豊かな里～

活動対象：和寒町大成・東和地区（15戸）

対象地域では、主にかぼちゃ・キャベツを柱とした複合経営が行われている。しかし、平均耕地面積の拡大に伴って収穫時の雇用労働確保が年々難しくなっている。産地維持のために、安定した収量確保と製品率の向上、作業負担軽減が求められていた。

そこで、かぼちゃの生産性向上のためにポイントとなる栽培技術項目の実践を働きかけた。また、作業負担軽減のために農業者が行っている工夫の共有を促した。その結果、1戸当たりかぼちゃ作付面積が拡大しているのにも関わらずかぼちゃの安定生産が達成され、栽培面積減少率は町平均より低く抑えられ、農業生産額は5年前より高い水準を保っている。

1 課題の背景



2 活動の経過



農作業の軽労働化(作業改善の実施)



3 活動の成果

具体的推進事項	目標事項	目標	実績	実績/目標
かぼちゃの安定生産	改善技術4項目以上実施	8戸	10戸	125%
畑作物(大豆)の安定生産	適正管理による反収向上	6戸	6戸	100%
農作業の軽労働化	作業改善の実施戸数	6戸	8戸	133%

かぼちゃの安定生産

働きかけによりほ場と貯蔵環境の管理体系が改善され、重点地区は町全体を上回る製品反収を維持している(表1、図1)。

表1 かぼちゃの栽培技術項目の実践戸数の変化(12戸)

改善項目	実践戸数(戸)	実践農業者増加数		
		初年度	最終年度	
ほ場管理技術	土壌分析・pH矯正	6	11	+5
	つる直し	1	8	+7
	生分解マルチ選定	9	12	+3
	スプレーヤ防除	1	9	+8
貯蔵環境改善	適期収穫	6	10	+4
	貯蔵温度管理	3	7	+4
4項目以上実践農業者	2	10	+8	

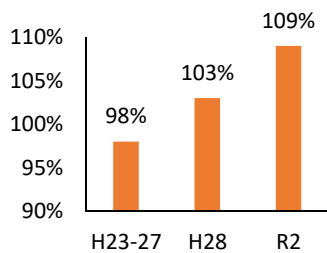


図1 重点地区かぼちゃ製品反収和寒対比(上位3品種)

畑作物(大豆)の安定生産

は種量の見直しを働きかけた結果、適性な栽植密度となり倒伏が防止され、出荷反収も増加した(表2)。

表2 大豆のは種量・栽植密度と出荷反収の変化(4戸)

調査項目	H28		H29		
	は種量(kg/10a)	栽植密度(本/10a)	は種量(kg/10a)	栽植密度(本/10a)	
農業者	C	12	36,075	8.5	24,697
	D	10	26,662	7.5	18,636
	I	12	26,894	8.5	24,545
	K	10	22,209	8.5	26,667
平均	11.0	27,960	8.3	23,636	

年度	H28	H29
4戸出荷反収平均(kg/10a)	236	275

農作業の軽労働化(作業改善の実施)

軽労働化の取り組みにより、かぼちゃ作付け面積は町よりも高く維持されている(表3、図2)。また、農業者や雇用労働者から「誘因棒や改良鋏のおかげで姿勢が楽になった」「選別機の導入で姿勢が楽になり、作業時間も短縮された」等、軽労働化を実感する声が出ていた。

表3 軽労働化取り組み実施状況の変化(A~M12戸中)(初年度実施○、最終年度実施●)

区分	管理		収穫				出荷		実施数		
	誘因棒	改良鋏	電動鋏	収穫機	選別機	H28	R2	H28	R2		
農業者	B						●			●	2
	C		○	●			●				3
	G						●			●	2
	H	●	○	●			●	○			4
	ADIM	●									4
	EFJK										
実施戸数										2	8

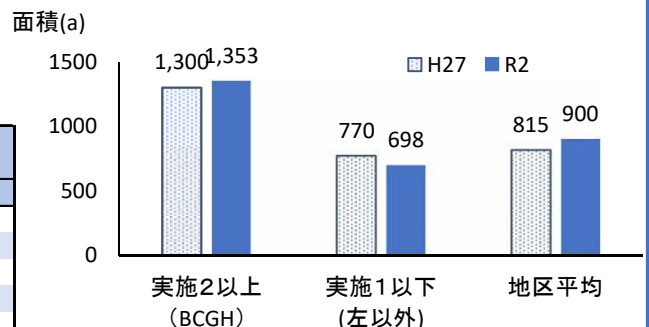


図2 実施項目数農業者別のかぼちゃ平均作付面積

経営経済評価

農業所得額は、かぼちゃの安定生産と軽労働化の推進により、活動開始前より高い水準を維持している(図3)。

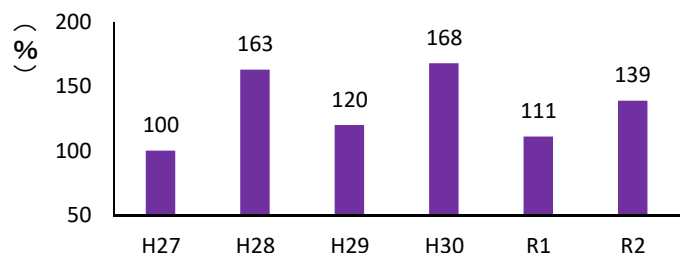


図3 農業所得額(%)の推移 H27を100とした指数

4 今後の課題

和寒町産かぼちゃのブランド化販売の活動が町・生産組織単位で行われているため、一層の強化を図る。